

令和5年度 第1回愛知健康づくり推進協議会 議事概要

- 開催日時 令和5年6月23日（金） 14時00分～16時00分
- 会場 全国健康保険協会愛知支部 第1会議室
- 出席委員等 学識経験者2名、保健医療関係者2名、事業主代表、保険者代表、
健康保険委員代表 計7名
- 出席事務局 愛知支部長、企画総務部長、企画総務グループ長、保健グループ長、
保健グループ長補佐2名、企画総務職員、保健グループ職員、
保健グループ保健師2名 計10名

《議題》

- (1) 「令和4年度保健事業実施結果について」
- (2) 「第3期データヘルス計画の策定に向けて」

--- 議事開始 ---

議題（1）「令和4年度保健事業実施結果について」

資料1-1、資料1-2 について事務局より説明

<保険者代表>

コロナ化の中で健診の受診率の低下などがあったが、最近は回復していて協会も同じ。
GIS 地理情報システムを活用した案内とはどういうものか。
現在一緒に取り組んでいる市町村など教えてほしい。

<事務局>

GIS に関しては、対象者の住所から近い医療機関を、GIS システムを活用して3つ選
び、その医療機関を掲載したご案内を実施。

すでに14市町村と連携して、がん検診と特定健診の同時実施を行っている。現在も連携
した集団健診を増やすため、各市町村へお声掛けしながら勧めている。

議題（2）第3期データヘルス計画の策定に向けて

資料2について 事務局より説明

<議長>

令和2年度の愛知県の135か所の医療保険者のデータから分析した結果。

<健康保険委員代表>

メタボリックシンドロームと予備群は分かるが肥満者はどういう基準か。

<事務局>

肥満者はBMI25以上、または腹囲が男性85cm以上、女性90cm以上。
メタボリックシンドロームはそれに血圧、血糖、脂質異常の判定が加わったもの。

<議長>

今は特に問題視される、女性のやせの項目も入っている。

<保険者代表>

「やせはBMI18.5未満」などの注釈があれば、より理解しやすくなる。

<議長>

10Pからは協会けんぽ独自で分析をされている資料。業態別の健診の実施結果を分析されている。これに対して気になった点やご意見を。

<事業主代表>

影響度は業種による被保険者数などが関係しているのか。
影響度が高いから力を入れていいというものでもないとわかった。

<議長>

12Pの表は、業態別の特徴によって別の取組ができるのではということ。情報を発信して様々な団体と情報を共有することで、各団体への働きかけができるのでは。自治体でも業種ごとに働き掛けるという問題意識を持ってもらえるのでは。

協会けんぽでは35~40歳未満のデータがあるので、いわゆる若年層にどう働きかけていけるかも非常に重要。

<保健医療関係者>

研究として若年労働者を対象に介入している。「健康」だけでなく「楽しみ」という視点も入ってくると、意識が高まり取り組みがうまくいくのではないかと。

職場で確認したところ、ここの健診機関はご飯が出てうれしかったなどの意見がある。若年層も楽しみとかプラスアルファの付加価値とかがあると、「来年も受けてみようかな」とか「来年はこっちで受けてみようかな」とか繋がる。

また若年層は会社ぐるみで取り組むことが必要。健診担当や事業主に理解をしてもらって、きっかけづくりをしてもらう。

<議長>

貴重な研究結果を、共有していただきありがとうございます。

<学識経験者>

データヘルスでは業種別に一番注目。そういう視点で行ったのは非常に評価できる。

協会けんぽは色々なデータを持っているので、それを活用して日本の医療の改革につながるようなチャレンジをしてほしい。

データヘルスの分析で、本当に病気との因果関係はどうか知りたい。データヘルスでないと客観的に見えない部分もあり、協会けんぽは一番やりやすい立場にある。

健康づくりに適正かどうかの検証が裏付けがされていれば、みんな健診をうける。今の健診の基準がいいのか裏付けるチャンス。

<議長>

モニタリングしていく機会が必要。最近は技術の進歩で、血圧や体重は自分たちで確認でき、血糖を測定できる。測定する機会、結果を見る機会を作ることが必要。数値をモニタリングしても、見直していくタイミングがないといけないし、自分が健康な状態であるかの答え合わせができる保健指導が必要。

<学識経験者>

保健指導のセミナーで、数値じゃなくてそれぞれの人に合わせた保健指導をしないとされていた。それが保健師ですよと。

<議長>

保健指導も体験とか行って、保健指導ってこんなに楽しいと発信してイメージを変えてもらえるといいのでは。

<保険者代表>

保健指導には一律に決められたプログラムというものがありますが、行動変容するには本人が気づき動かないと結果がでない。無理強いではなく、その人に気づいていただくことが大事。

数値的事業評価も必要ですが、参加者の声とか感想を伝えることで保健指導を継続してもらえることがある。

<議長>

協会けんぽでもレビューを書いてもらって、情報をもらおうと良いのでは。

<保健医療関係者>

結局、1回目初回指導を受けても次につながってない。やはり楽しみがないと、2回目に繋がらないし、繋げると効果が上がってくる。1回だけだと効果がない。

<議長>

健康をもっと楽しくポジティブに行える所に紹介していただくと、保健指導等が終わっても次につながるのではないか。「後は自分でやってください」だとモチベーションが続かない。

結果を見て駄目だと思っているところに、保健指導で「だめですよ」と言われると、もう受けるのをやめようと思ってしまう。

<保健医療関係者>

結果を見てわかっているから、「自分でも分かっているのに言われてもなあ」というのがある。

<健康保険委員代表>

聞いていて本当に勉強になった。社内で、健康についてイベントをしているが、押し付けじゃないかという意見がある。結局、若い人は無関心。若いから病気について心配してないし、体力もすぐ回復するから。考えることで健康へ意識が向かうだろうから、気づいてもらうための施策を考えることが大事。

イベント的に握力測定 of 機器を置いて測定値を順位付けしたら、若い子たちが面白がって楽しそうだった。何か楽しいことを追加して健診等をやると意識も向いてくれるし、年齢が高くなった時に「もう少し若い時に気を付けていればよかった」と思うようなことも減っていく。

<議長>

工夫していろいろな取り組みされていて素晴らしい。

こういう話が、協会けんぽに健診・保健指導を受ける意識を持ってもらえるような、事業計画のアイデアが出るきっかけになってほしい。

<保険者代表>

働く人の中には、身体 of 調子を崩すと仕事を失うという状況 of 人もいるので、受診もしないで無理して働いている人もいる。

<事務局>

民間企業は事業主 of 考えによって、非常に大きく作用される。

<議長>

色々な組織がありますが、中からの変革は弱く、外から発言していただかないと、そのままにしてしまうところがある。

こういった協議会などは、普段とは別の視点が得られると思っているので、こういう機会を拡大的に発展させていくと、外からどのように見られているかというのがわかる。

上手く活用して、協会けんぽでは絶対やらないだろうとみんなが思うような取り組みをやって、一石を投じていただけるとよい。

1 企業で難しいならばどこかと組んで「こんな連携があるのか」というようなもの of 考えていただければいい。

せっかくデータがあるので沢山分析して頂きたい。そのために愛知支部として、データ分析環境をぜひ整えていただきたい。大きい事業所が多い愛知支部で、「切り口が面白いな」と思ってもらえる取り組みをして、将来 of 協会けんぽ of 在り方を作ると嬉しいと思います。

<保険者代表>

今日のデータ分析は、大変参考になりました。一方で今回は健診データだけであったので、

合わせて医療費のデータも分析をして、健診結果と医療費をクロスすると、データヘルスとしてより必要な層に狙いをつけた次の段階の事業が実施できる。

<事務局>

協会けんぽも少しずつデータ分析を進めていこうとしているところです。
もっと横の連携をとって協力して事業を行っていく。

<議長>

愛知県で職域保健と地域保健が情報や課題を共有し、その地域にあった課題に連携して取り組んでいこうという地域職域連合というのがある。それぞれがもう少し視野を広げて、自分の組織以外に関心を持ってもらって、関係のありそうな人に声掛けができるような流れができると、同じ志を持つ者同士で協力して進めていくことができる。

今必要なのは仕事の優先順位付け。その仕事が本当に必要なのか判断して、やめる決断をするリーダーが必要。効果のないものは、コストもかかるし時間もかかるので、そこは断捨離をするのが必要。

今はいろいろなツールができています。若い人ならもっと提案をしてくれるかもしれない。上司がそれを採用していくと、組織も少しずつ変わり、若い人の自信につながって、もっといろいろと発言してくれる組織になる。

<学識経験者>

協会けんぽは、事業所に行く機会がなく、「現場感覚」、相手をする加入者の中小企業の現状を知らない。現状を知っていると感覚的に「じゃあ、どこに問題があるか」見つけやすい。1年に1度でも商工会議所や、事業所等の現場に行ってみて体験すると、自分の仕事の意義もわかって、士気の向上に繋がる。現場感覚がないと横の連携も難しいし、計画が現場と乖離してはいけない。

年配の人が様々な経験を持っているように、どこかで現場の知見を得てフィードバックしていくということが、必要。

<議長>

組織から外に出て外部と接触していただく若い人を増やすと、若い人も客観的に組織が見える。

今日のこういった会議もその一つで、こういう自由にディスカッションできる会議は他にはないので、非常に重要な会議だと思う。

--- 議事終了 ---